

## 五輪さん

拔里村は、山の手の方から、だんだん南に向かって開けている小さな村でした。

遠い昔は、わずかな戸数しかありませんでしたが、川の荒れるたびに平地が広がり、村人たちは堤防を作っては、南へ南へと開墾を続けていきました。田畑の少ない村のこと、新開地は、それは、それは尊いものでした。

五工門と仁工門は、拔里村でも財産家で、相当な土地を持っています。だが、作男や使用人を使って、いっそう新開地を広げていきました。そうして汗を流して作った田畑も、時々起こる洪水のために流されたり、土砂に埋もれて境界が判然としなくなることも、たびたびでした。そのたびに、五工門と仁工門は、互いに自分の土地の境界を見失い、自分のものだと主張し合うようになりました。ともに汗水流して開墾した土地でもあり、境界が不明になると、二人の土地争いは、だんだんと激しいものになりました。

この大石とあの木株を結んだ線から東が仁工門のものだ、いや、あの岩の突端から、あの川の曲がり角の線が五工門のものだ、と互いに自分の土地だと主張し合うので、二人は、いつしか反目し合うようになっていきました。

村の人々に立ち会ってもらって相談したり、皆の考えを借りようとし

ても、一面に流された土地の境界など誰にも決められるものではありませんでした。

「仁工門さんの言うことを聞いてみると、そこが境のような気もするのう。」

「いや、五工門さんの言う、岩の突端から川の曲がり角というのが、ほんとうじゃないかなあ。」

「そんだけえが、川の曲がり角は水が出る前は、まっ上の方で曲がっていたような気がするが、そうじゃないっけかのう。」

話は、どこまでいっても、決定的なものにはなりませんでした。仁工門と五工門は、それにもかかわらず、何回も何回も人々に寄ってもらっては、同じような話をくり返しましたが、らちがあきません。村の衆も、しまいには、境界争いに巻き込まれるのではないかと不安になってきました。それで、へたなことを言うと、

「あいつは、仁工門派だ。」

「こいつは、五工門派だ。」

と、互いに二派に別れて、小さな村で気まずい思いをすることになりました。困り果てた村人たちは、

「どうぞらか、こうして何回寄り合いをしたって、どうもうまい話にならないで、いっそうのこと、役所に願ひ出て、二人の言い分を聞いてもらったら。」

ということになりました。

仁工門と五工門は、弁のたつ仁平と五平をそれぞれ代理者に選んで、互いの主張を役所に行って話し、決断を下してもらうことにしました。そのころの決裁所は浜松にあって、二人の使者は野を越え、山を越えて

何日もかかって往ったり来たりしました。仁工門と五工門は、そのたびに、何とかして自分の言い分が通ってくれるようにと知恵をしぼり、納得させるような資料などを揃えて使者を送り出しました。

年を越えて、いよいよ裁判も大詰めに近づくころ、五平は、決裁所では、どうも五工門さんの言い分の方に分があるような感じを持つようになりました。仁工門と仁平は負けてはならんと、知恵をしぼり、相談をしました。そして、仁平は、最後の裁判を受けに旅立って行きました。

一方、五工門は、五平から裁判の風向きが有利らしいと聞くと、内心喜んで、

「おまえ、そう言うが、ふんとに大丈夫ずらなあ。自分だけが良いように思い込んでるじゃないなあ。」

「そんなこたあ、ごぜんせん。仁平の方は、問いつめられて困ることも度々だっけし、役所じゃ、五工門さんの方が、筋が通っていると思ってるようですぜ。」

心配で心配でたまらない五工門は、何度も同じことを言っては、念を押して話し合いました。

いよいよ五平も判決を受けに浜松へ出かけることになりました。

「五工門さん、こんだあ間違いない勝って来ますだ。五工門さん、わしの戻るころ、あの井名山のてっぺんから、下りの方をようく見張っていて下され。いつときも早く吉報を知らせたいで、あの峠に着いたら、傘で合図をしますだ。勝ったら傘を広げて高く振るでう。まあ、そんなこともないらけえが、負けたときや、すぼめたまま上げるでう。」

と、合図の約束を決めました。

五平は、大丈夫勝てるという自信を持っているだけに、明るく元気が

ありました。わらじに尻しりつばしより、手荷物てにもつに傘かさをかついだ旅仕度たびじたくで、威勢いせいよく出かけて行きました。五工門は、井名山いなやままで見送みおくつて、よろしく頼たのむと念ねんを押おしました。

五工門は、それからというもの、毎日のように井名山いなやまの頂上ちやうじやうに立つて、下流かりかうの峠あたの辺りあたをじつと見つめるようになりました。浜松はつまつまでは、二日ふつかもかかり、裁判さいばんもあるので数日すうじつはかかるといふのに、五工門は、気がせいて落ちつきませんでした。峠あたを通る人は、誰もかれもみんな五平ごへいのよように思いえて、居いても立たつてもいられないような思いいでした。

井名山は、切り立った岩はだを突き出し、下をのぞくと目もくらむような高さで、大井川の激流げきりゅうがゴーゴーと岩いわを洗あらって流れていました。井名山の頂上ちやうじやうへは、細い尾根道おねみちが一本通とおつていてだけで、思おもわず足がすくむようなこわさです。

「必ず勝かつて戻かえりますだ。」

と、出かけて行いつた五平ごへいの言葉ことばに勇氣ゆうきづけられ、峠あたで傘かさが開ひらかれるのが待またれて、仕事しごとも手につかず、毎日毎日、井名山の頂上ちやうじやうに立たつていましまた。

幾日いくにちかたつて、遠い下流げりかうの峠あたに、五平らしい姿すがたが現あられました。男おとこは、峠あたに来ると、見晴みはららしのよい突端とつたんまで出でて立ち止とまりました。五工門はそれを見ると飛び上とがあつて喜びました。

「五平だ……。ああ、五平だ。」

「裁判さいばんは、勝かつたずらなあ。」

五工門は、はやる心こころを押おさえながら、峠あたの方かたをじつと見みすえました。

一方、使者しやの五平ごへいも、いつときも早く約束やくそくの合図あひずを送おくつて、五工門に知らせたいと、急いそぎに急いそいで峠あたに来たのでした。



「やれやれ、やっと峠に着いた。五工門さんも、さぞかし喜ぶにちがいない。よいっけ、よいっけ。勝てるたあ思ってたけえが、ふんといっけなあ。」

ひとりごとを言いながら、峠の端に身をのり出しました。井名山のでっぺんを見すえると、何か白いものが振られています。

「ああ、五工門さんだ。五工門さん、とうとうやりましたぜ。」

五平は喜びのあまり、約束の合図も

すっかり忘れて、傘を高くさし上げて大きく振りました。

「勝ったぞう。五工門さん。勝ちましただよっ、五工門さあん。」

五平は、大声で叫びながら、傘を振り続けました。

井名山の頂上では、今日か明日かと吉報を待ち続けた五工門が、峠に五平を発見して、喜びに我を忘れ、手拭いを振り回して合図を送りました。ところがどうでしょう。峠の傘は、すぼめられたまま、高々と振られて



いるではありませんか。五工門の顔からは血の気がなくなり、がっくりとその場に腰を落としてしまいました。

「ああ、何ということだ。やっぱりだめだったか。こんだあ、大丈夫だと思つてたに……。お役所もあてにやならん……。」

五工門は、期待が大きかっただけに、すっかり落胆し、最後の頼みも切れてしまった絶望から、生きる気力さえ失つてしまいました。そして、腰の脇差を抜くと、井名の山頂に端差し、自害してしまいました。

一方、使者の五平は、無事に連絡の合図もとれ、喜び勇んで峠から駆けに駆けました。一刻も早く井名山で、五工門と手を取り合つて喜びたかったのです。今日までの苦勞を思うと、どんなに五工門が喜んでくれるか、早く五工門に会いたいと道を急ぎました。

しかし、井名の峠に五工門の姿は見えませんでした。五平は、すぐに山頂に向かつて駆け出しました。井名山のてっぺんに駆け登つた時、五平は、そこに五工門の変り果てた姿を見て棒立ちになりました。しばらく、呆然と眺めていましたが、そのわけは容易に理解できませんでした。

「五工門さん、せつかく勝つて戻つたつちゆうに、一体どうしただ。」

「五工門さん、なぜ喜んでくれんのじゃ。」

「……………」

「五工門さん、なんで死んでしまっただよ。」

五平は、五工門のからだにとりすがつて、男泣きに泣きました。

大井川の水音がゴォーと激しく鳴っています。

井名の山頂の赤松をヒョウヒョウと鳴らして風が吹き過ぎていきます。

五平は、ようやく我に返りました。五工門にあれほど喜びの合図を

送ったのに、なぜ死んでしまったのか。

「……………」

「そうか、そうだったんだ。」

五平は、やっと自分が傘をすぼめたまま振ってしまったことに思いあたりました。

「ああ、五工門さん、かんにんして下され。かんにんして下され。わしが悪かった。ふんとにすまんことをしてしまった。五工門さん、どうかかんにんして下され。」

五平は、あふれ落ちる涙をぬぐいもせず、再び五工門のからだにすがりついて泣きました。

やがて、五平は、ふところの守り刀を取り出すと、一気にのどを突いて自害してしまいました。

その後、村人たちは、二人の死を悲しんで、井名山の山頂に、ささやかな五輪の塔を建てて供養することにしました。